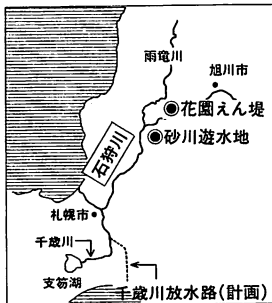


破壊した環境の復元こそ急務

「直線化の思想」に終止符打ち 自然の営みに学ぶ公共事業を

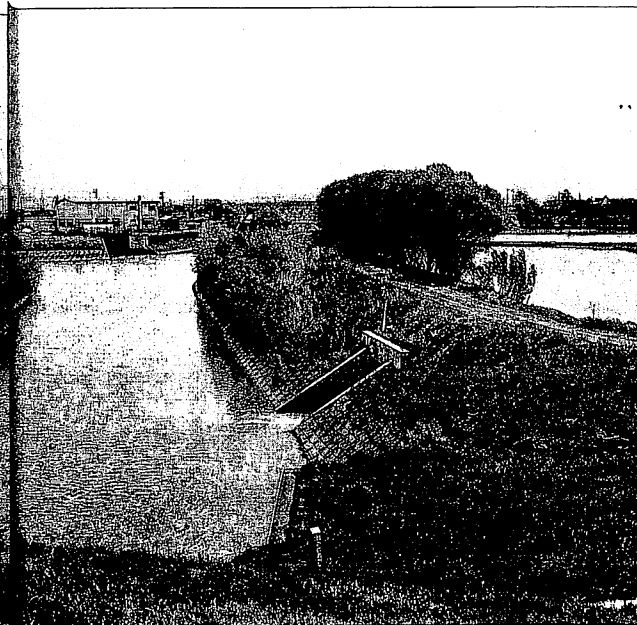
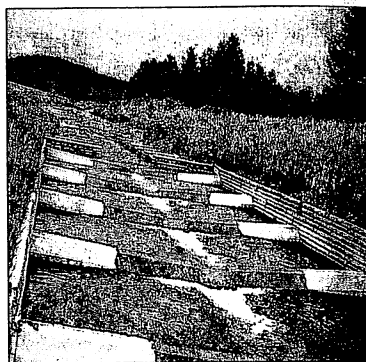
ルライター
滝川康治



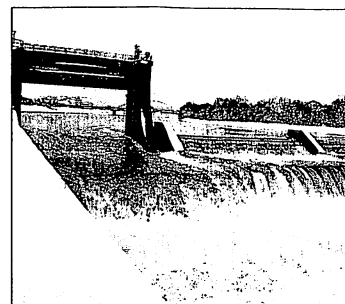
石狩川流域



天塩川流域



千歳川放水路の起点となる予定だった大学排水路。天塩川水系バンケナイ川のAGS事業—魚は上れるようになっているが、河畔林がほとんどない(左上)



ようやく魚道が造られることになった石狩川の花園堰堤(深川市内で)

柔軟さを欠いた放水路の15年

建設省が本年度調査費の半額を執行凍結したことで、事業見直しの方向が決定的になった千歳川放水路計画。河川を逆流させる自然環境の大がかりな外科手術よりも、石狩川水系の総合的な治水対策を進めながら環境や人々の生活を守る道があっただけに、今回の見直しは当然の流れである。

放水路問題を何度かレポート(本連載)が、あまりにも壮大な話だけに本気で

載PART2など)してきた、わたしの目的は、この計画は柔軟さを欠いた開発庁(局)河川事業を最も象徴したものと映る。

「ボタンの掛け違い」は、八〇年代初めにまでさかのぼる。

日本海に流れ込む千歳川の水を連河で太平洋に導く構想は戦前からあったが、あまりにも壮大な話だけに本気で

取り組まれることなく、長い年月が流れた。しかし、八一年八月に起きた観測史上最大の洪水をきっかけに構想が再燃し、翌年の河川審議会(建設大臣の諮問機関)で「太平洋放水路」を盛り込んだ基本計画が決まった。

より具体的な話として急浮上したのは八四年、のちに汚職事件で有罪判決を受ける稲村左近四郎氏(故人)が道開発庁長官のときだった。

北海道の実情に疎い、短命長官の同氏は当初、放水路構想の存在を知らなかった。国会質疑の準備をするうちに構想を聞いて、「立派なプランがあるではないか。来年度予算編成に向けて、さっそく具体化に取り組み」と号令をかけた。政治家の思いつきだ。当時の道新は、「これだけの大事業ですから、もっと着実に計画を練り上げる時間がほしかった」(同庁中堅職員)「長官発言は」あまりに唐突な印象を受けた「(同庁OB)と、関係者の困惑の声を報じている。目玉事業を手に入れたつもりで政治界が主導し、行政内部の十分な詰めもなく急発進したのが過ちの始まりだった。

その後の十数年の軌跡は、いろんな

のあり方もおかしい。

洪水時に石狩川の水位が高くなることとが、千歳川の氾濫の大きな要因である。流域の開発や河道のショートカットなどで排水路化した石狩川は、濁流が一気に流れ下り、千歳川に押し寄せると、千歳川の流量の抑制が治水対策の要諦といえる(もちろん、お盆の底のようになっている千歳川流域の内水氾濫対策は別に必要だ)。そのためには、川を直線化して短時間に水を抜く手法ではなく、蛇行部を復元したり、遊水地を確保するなど、自然環境にマッチした治水対策が有効だろう。「環境保全」と「治水」は、決して対立する図式ではない。

「55年体制」が育てた硬直官庁

「世界各国の地域開発法のなかで、地域住民の生活向上をうたっていないのは、北海道開発法だけであろう」と、自著のなかで看破したのは民族学者の梅棹忠夫氏である。三十七年前のこの指摘は、戦後の北海道開発がもつ本質的な矛盾(住民不在)をズバリ言い当てたものだ。

同法に基づいて一九五〇年に道開発庁が設置され、その出先機関として開発局が誕生した。そこには、社会党の田中知事に開発事業を任せられないので、保守党政府が直接予算を分捕る——党利党略がうごめいていた。道側は中央集権化に強く反発したが、押し切られた。開発庁の誕生で北海道は政

府の支配下におかれた。開発事業に地方自治はおよばず、道民の参加も拒む仕組みがつけられてしまったのである。こんな「五五年体制」そのものの生い立ちが、自治体を見下す開発庁(局)の姿勢を生み、公共事業に対する道庁・道民の依存心の強さを育てた。それを支えたのが「開発予算の一括計上」という固費の分捕りシステムである。前出の放水路計画は、そうした不幸な歴史のなかで生まれ、計画から十五年も間、不毛の日々が続いた。

このところ公共事業に対する風当たりが強まっている。わたしも、いくつ

高めたい石狩川筋の遊水機能

石狩川は、大雪山系に端を発して多くの支流を合わせて日本海に注ぐ、全長三百六十二キロメートルの大河だ。が、これは蛇行部のショートカットという大がかりな整形手術を受けたあと、人工的な川の姿でもある。

一九一八(大正七)年の生振捷水路の着手に始まり、六九年の砂川捷水路の完成に至るまでの半世紀、二十九カ所で工事が行なわれ、実に百キロメートル以上も短くなった。続く農地開発

かの検証記事を書いた。開発局の職員たちは肩身が狭いらしく、「仕事をしていた、ときどき虚しくなる」と漏らす人もいる。個々の職員は真面目で仕事熱心、善意の人たちである。が、事業はやはりハード中心のものが多く、組織は硬直化したままで時代の流れに疎い体質はあまり変わっていない。近い将来、統合が確実な開発庁だが、河川環境を復元したり、伝統的な手法を取り入れた柔軟な治水対策を進めるなど、やるべき事はたくさん残されている。組織を再生させる最後のチャンスかもしれない。

などで川沿いの湿地帯が減り、蛇行がなくなつたことで遊水機能が下がり、洪水時の出水を速める結果を招いた。関連の河川工事もあって、生き物の生息環境は悪化してしまつた。わたしは最近、石狩川筋を車で下る機会があつた。

支流の一つ・雨竜川下流でショートカットの準備工事が行なわれていた。開発局のパンフなどには、八八年の留萌・空知地方に集中して降った豪雨を

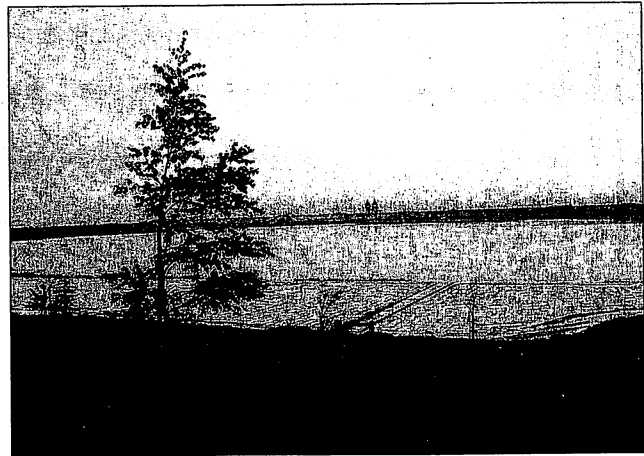
きっかけに治水計画を変更したもので、この工事によって、「雨竜川などの水位が下がり、洪水被害が軽減される」と書かれている。

が、ショートカットで水位を下げるという単純な手法は、すでに時代遅れになっている。切り替えて川の生態系も一変してしまう。むしろ、雨竜川にもたくさんあつた蛇行部を出来るとこ

ろから元に戻したり、森林を整備して保水能力を高めるなどの手法の方が、時代にも、自然にも合った河川事業ではないのか。

砂川市内の石狩川左岸には、過去のショートカットによって生まれた三日月湖を利用して造つた、約百八十八ヘクタールの「砂川遊水池」がある。池の周囲には、「砂川オアシスパーク」と呼ばれる船着場や広場などの観光施設が、

同市の手で造成されている。遊水池の事業費は約二百億円、洪水時には一千五百万トンの水を貯め込むことができる、という。



三日月湖を利用して造つた砂川遊水池。地元自治体は周囲に観光施設を造成した

灰色のダムで川をせき止めて洪水を調節するよりは、まともな治水対策だとは思ふ。が、もっとシンプルで効果的な遊水池はできないのか、というのが、わたしの感想である。水門

や管理施設には「中世のヨーロッパ風」とかいふデザインが施されていて、パンフの表紙も飾っているのだが、まるで北海道の風景になじんでいない。余計なお金をかけている感じた。ここは観光とセットになつた、えらく箱庭的な遊水池の典型なのである。

八一年の大洪水のあと、開発局は砂川から下流の四、五カ所に遊水池を造る方針を立てたが、砂川遊水池を除いて実現していない。遊水池で洪水を調節することは、千歳川流域の治水対策

にも大いに役立つのである。深川より下流には、大小さまざまな三日月湖がある。①石狩川の堤防の外側にもう一つ築堤して、ふだんは農地に、数十年に一回の洪水時は遊水池にする②三日月湖の貯留能力を高める③蛇行を戻す方法も考える——といった箱庭的でない、地域に応じたやり方で知恵を絞れば、遊水機能を高める道はいくらでもあるはずだ。そうした手当てをおろそかにして、放水路やダムの必要性を論しても説得力に乏しい。

天塩川に現れた奇妙な施設

北海道第二の長流・天塩川は北に向かつて流れる大河だ。石狩川とは対照的に、流域人口が約十万人と少なく、市街地周辺を除くとコンクリート化されておらず、自然状態がよく保たれている川である。

そんな自然の豊かさに魅せられて、天塩川を訪れるカヌーリストが増えてきた。流域の多くの町にカヌークラブがあり、名寄市から天塩川河口までを下るレース「ダウン・ザ・テッシ・オブ」や「カヌー・ザ・テッシ・オブ」と銘打つたイベントもある。静かなカヌーブームといえる。

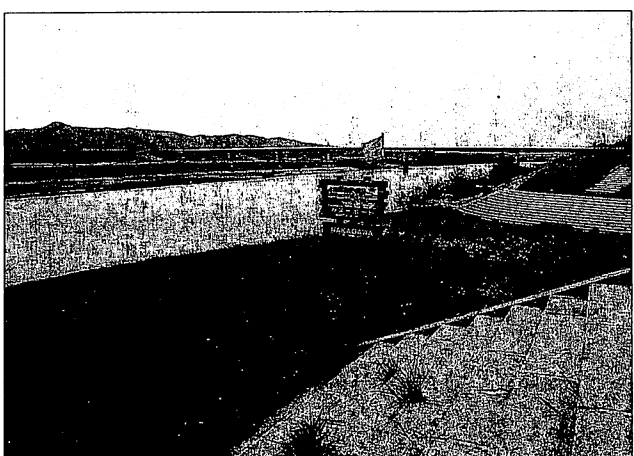


千歳川流域の「遊水区域」には産廃埋め立て地と化している場所も(江別市内で)

河川管理者の開発局は、そんな風潮に乗じた。ここ数年、流域のほとんどの町に「カヌーポイント」と名付けた船着場を造つたのである(一部は造成

中。が、カヌーを楽しむのに船着場まで必要なのだろうか。幕末の探検家・松浦武四郎のような丸木舟で天塩川をさかのぼつた人を見習え、とまでは言わないが、河原からカヌーを漕ぎ出せる場所はいくらかもある。その方が自然の醍醐味も体感できるだろう。

この事業、開発局によるカヌー愛好家への過剰サービス、予算消化のため



愛好家への人気取りか? 開発局が造つたカヌーポイント(中川町内で)

の仕事の印象が強い。一カ所の造成費に一億円近い予算を投じたところもある、という。「工事前にカヌー愛好家や自然保護団体の意見を聞いた」と開発局側は言っているが、当然の自然保護関係者などからは、

「野鳥生息地の樹木を伐採して造つてしまった」「意見を聴かれたときは、すでに造成場所や構造が決まっていた。形式的な意見聴取のやり方だ」といった声が聞か

てくる。開発局はいま、「魚・鳥・人にやさしい水辺づくり」をキャッチフレーズに、アクア・グリーン・ステラテジー(AGS)という横文字の事業を進めている。所定の治水安全度を確保したうえで、生態系にも配慮するモデル区間の設定を行

ない、河川改修工事を実施する——というのが、この事業の目的とされる。

道北の中川町内を流れるパンケナイ川に、この事業の施工例がある。川のそばにはサケ・マス孵化場があり、もうすぐで本流の天塩川へ注ぐ場所。魚道付きの床止めなどを施し、丸太を使った護岸、木製の柵に自然石を置いたところ……。自然に配慮した、と言わんばかりである。河川敷は公園になつて

いて、東屋や遊具、ツツジの植栽などを配している。

が、どうも不自然なのだ。河畔林がほとんどない。生えているのは外来種の牧草、誰かが実を植えたのか護岸の隙間にはカラマツが育っていた。元の自然環境に復元していく、という視点が欠けている。設計・施工した担当者は努力したのだろうが、「木を見て森を見ない」式の工事に見える。

開発側の都合優先をやめよう

観光施設と抱き合わせの遊水池、カヌーポイント、一部のAGSのような、人間の都合に合わせて河川をいじる仕事ではなく、開発のなかで破壊してしまった自然環境を復元する営みこそ、これからの北海道の河川事業がめざす方向ではないか。必要性が乏しくなった砂防ダムや堰を撤去する(無理な場合は魚道を整備する)、河畔林を育てる、川の蛇行を戻してやる、シンプルな遊水池を造る……などと、仕事はいくらでもある。時間も金もかかるし、何よりも知恵を絞ることが求められる。豊かな自然環境を取り戻すための投資、と思えばいいではないか。

機械力を駆使して、速く、真つ直ぐにという手法は、もう時代遅れになっている。わずかな洪水調節のためにダムを建設したり、河川敷にゴルフ場や市街地にあるような公園を造る、といった考え方も改めるべきだ。「川をどうしていくか」を河川技術者に任せてしまつた、住民の側の無関心や依存心も反省した方がいい。

千歳川放水路に象徴される自然をねじ伏せる思想が破綻し、開発庁もその役割を終えた。そんな過渡期のいま、多くの恵みを与えてくれた身近な川を取り戻すことこそ、住民と開発行政の双方にとっての大きな課題だろう。